

2023年9月21日と22日の2日にわたり一泊二日で神戸大学大学院農学研究科附属 食資源教育研究センターにて実習をさせていただきました。今回は大阪公立大学生生活科学部と帝塚山学院大学人間科学部食物栄養学科との合同で実習を行いました。

#### <1日目>

はじめに牛舎の見学とそれぞれどんなウシがいるのかの説明を聞きました。牛舎には繁殖牛舎と肥育牛舎のふたつがあり、それぞれ目的の違うウシが育てられていました。

牛舎の見学を終えると、トラクターの基本操作の体験をしました。実際にトラクターに乗ってみて、発進やハンドル操作を教わりました。私は自動車の免許をまだ取得していなかったので人生初の運転でした。慣れないことばかりでしたが、特にペダルの操作に苦戦しました。クラッチペダルから足を離してトラクターを発進させるのですが、どれだけ慎重にそっと離してもガゴン！！と背中が座席に押し付けられるように発進してしまいます。しかし、ドアや窓がなく開放的で視界がよく、速度もかなりゆっくりしているので初運転にはもってこいの乗り物なのかもしれません！基本的な操作に慣れたら、少し離れた農場に行き、四角い圃場の周りを一周運転しました。角を曲がる時、ハンドル操作を誤ると圃場に落ちてしまうかもしれないと思い少し不安でしたが、実習に参加した全員がうまく曲がりきることができました。



(↑トラクター操作体験の様子)

1日目の最後にはウシの給餌について体験しました。ウシの餌には粗飼料と濃厚飼料の2種類がありました。粗飼料は草や草をもとに作られたエサでウシにとっての主食にあたります。濃厚飼料はトウモロコシや大豆をもとに作られたエサでウシにとっての主菜にあたります。さらにバガスと呼ばれるサトウキビを圧縮した搾りかすを与えました。これは粗飼料、濃厚飼料を与えた後に与えるもので、ウシの食欲を増進させる働きがあるそうです。エサのなかで一番匂いが強く、正直わたしは苦手な匂いでしたが、この匂いが食欲を刺激するのだと思いました。これらのエサはウシの体重や日々の様子を考慮してバランスよく与えられています。また、ウシのエサには動物性の試料を与えてはいけないということも学びました。かつては安価でタンパク質などの栄養素が豊富に含まれている動物性飼料を用いていたが、BSE発生やまん延の防止策の一つとして今ではその利用が禁止されているそうです。牛舎内に持ち込むこと

や同時に受け入れることなども禁止されており、その徹底ぶりに BSE が発生・まん延した際の被害の大きさが相当なものであることがうかがえました。

### <2日目>

2日目の朝にもウシの給餌を行いました。ウシは1日に2回、朝と夕方に食事をするそうです。エサの入ったバケツをもって牛房に近づくとはやくはやくと言わんばかりに顔を近づけてくる様子がかわいらしく感じました。私が担当した牛房では粗飼料と濃厚飼料を合わせて4種類ほど与えましたが、それぞれ十数kgほどの量を用意しました。それにも関わらず、あっというまに食べ終わる姿を見てとても驚きました。



(↑ウシの給餌の様子)

朝の給餌を終えた後はウシの取り扱いについて教えていただきました。

### ロープの結び方

ウシを牛舎から出したあとに何らかの用事で少しの間ウシと離れなければならないときなどウシを柵につなげておく必要がある場合があります。このときのロープの結び方を練習しました。ウシが急に倒れてしまうといった事態が起こったとき、ウシは首がつられた状態になってしまいます。このとき、人間が瞬時にロープをほどき、ウシを解放させなければなりません。しかし、ウシ自身が簡単にほどくことができるような結び方では、ウシがどこかへ逃げってしまうかもしれません。人間は瞬時にほどくことができるが、ウシは自らほどくことができないような結び方を教わりました。ロープの結び方ひとつとっても、さまざまな事態を想定しウシの安全に注意をはらっていることを知りました。

### 散歩

ロープをうまく結べるようになった後、散歩に行きました。鼻輪に通したロープをリードのように扱って動かします。しかし体格が大きく体重もとても重いウシを思うように動かすのは難しく、完全にウシのペースで散歩が進んでいきました。



(↑道草を食べるのに夢中で全く進んでくれない散歩)

散歩から帰ってきたあとにはブラッシングをしました。丸いおろし金のようなくしを使いました。ブラッシングは毛に絡まった虫やほこり、汚れなどを取り除きかゆみを抑える効果があるそうです。少し強めにかいてあげるのが気持ちいいらしく、毛並みを整えながらすみずみまでブラッシングを行いました。また、ウシが自分で触れることのできない背中や腰をブラッシングすることでウシのストレス軽減につながったり、定期的なブラッシングによって人間との信頼関係を築くことができたりするというメリットもあると教えていただきました。

### 鼻紋採取

ウシの鼻は人間の指紋と同じように一頭一頭異なったしわ模様がついており、個体を識別する証拠になります。インクをローラーにつけてウシの鼻に塗り、紙を押し付けて写し取るといった方法で鼻紋の採取を行いました。ウシが動かないように全身を使って抑える人、インクを塗り残しがないように塗る人、ウシが鼻をなめてしまう前に紙を押し当てる人に分かれて行いました。紙に写し取る際、ウシが少しでも動いたり紙がすべったりすると鼻紋がにじんで判別が難しくなってしまうのが難しかったです。鼻紋を取り終えると、数頭のウシの鼻紋と自分が取った鼻紋を見比べ、どれが採取した鼻紋を持つウシか当てる、というクイズをしました。よく見ないと間違えてしまいそうなほど細かい違



いでとても面白かったです。



(↑鼻紋採取の様子)

### 体重測定

最後に、ウシの体重測定を行いました。ウシを体重測定場所まで移動させる追い込み班、体重記録班、ウシが体重を測っている間に牛房を掃除する班の3つに役割分担して行いました。ウシの大きな体を押すのは大変で全体重をかけて押すだけでなく、ウシの苦手な大きな音を出すなど工夫をしながら誘導しました。月齢の大きいウシは牛房から出た途端に体重測定場所まで一目散に駆けていきましたが、月齢の小さな若いウシはなかなか移動させるのが難しく、ロープを引っ張りながら一頭ずつ誘導して行きました。やはり毎月のように行っていると慣れてきてスムーズに行えるようになるのだと思いました。また、牛房の掃除ではウシの体重によって端に寄せられた敷料をスコップで中心に戻す作業を行った。糞尿の混じった敷料はかちかちに固まってなかなか掘り返すことができませんでした。どの作業も力を使うものが多く、これを定期的に行う生産者の方々は本当に大変だと感じました。

今回の実習では、実際にウシと密に接し、その生育現場を間近に見ることができました。普段目にする牛肉はこのようなさまざまな人が関わり、愛を持って生育することでできあがっているのだと認識しました。また、今回の実習は違う大学や学部との合同でのものであったため、交流の中で違った視点の話を聞くことができおもしろかったです。たった2日間の実習でしたが、日常では体験することのできない内容の濃いものばかりでとても貴重な機会となりました。改めて、この実習に参加してよかったと感じました。

最後まで読んでいただきありがとうございました。